



日経ビジネスに見る「経済先読み・解説」 157号

経営コンサルタント 栗田 剛志 12.09.10

発行元：m9コンサルティング

<http://www.m9consulting.biz>

このメールマガジンは、今週発売となる日経ビジネスの中から気になった記事を選び、私なりの視点で考えたことについてお伝えするものです。会社での朝礼時のネタ、取引先との会話、同僚との間の話題づくりにお役に立てたらと思い、毎週月曜日に発信いたします。

「日経ビジネス2012年9月10日号 no.1657  
『隠居ベーション～100歳まで働く時代がやってくる』」より

### 【働き方に区切りをつける】

今年の7月のことでした。政府の国家戦略会議で、「これからの日本は、40歳定年制を認めてもいいのではないか」という大胆な提案が飛び出しました。

言葉だけを見れば、とんでもないことだと捉えられても仕方のない話です。しかし、この提案の本当の意味は、副題に綴られた「みなが75歳まで働くために」という言葉が表しています。

40歳定年制は、早期引退勧告という意味ではなく、「長期にわたって仕事を続けるために、40歳くらいで一度、区切りをつけてみてはどうか」ということなのです。

日本における勤労の在り方が、ここ数年で大きく変わってきています。これまで当たり前のモデルとしてあった、学校を卒業して勤めた会社に定年までいるということが難しくなりつつあります。

しかも、高齢化に伴い元気な高齢者の方々が巷にあふれ、なおかつ近い将来には、労働力人口が減少し、働き手が足りなくなるとの予想もされています。

老人は、財政を食いつぶす社会のお荷物ではありません。どう活用すればいいかが、話合われてこなかっただけのことです。

60歳や65歳で隠居するのは、早すぎます。これからは、社会が放っておかなくなるのかもしれない。

藤沢に、100歳でありながら現役のサラリーマンとして、毎日通勤電車にのって東京まで通う方がいらっしやいます。福井福太郎さんは、1912年生まれの100歳です。現在は、宝くじを委託販売する東京宝商会の顧問を務められています。

福井さんは、こう言います。

「今の会社は70歳で働き始めた。でも、人生で一番長く勤めた会社になったよ」

96歳のときに、会社に「もう辞めようと思っている」と申し出たことがあったそうです。しかし、会社は慰留を求めました。なぜなら、福井さんには、ほかの者では補いきれない英知が宿っているからです。いざという時に、福井さんの助言が支えとなるからです。

福井さんが生きた100年間は、激動そのものでした。

11歳で関東大震災に見舞われ、17歳で世界大恐慌が起こり、25歳の時に日中戦争勃発、29歳で太平洋戦争勃発、33歳では東京大空襲と終戦を体験しています。

その後も、東京オリンピックは52歳、大阪万博は58歳、バブル経済の崩壊は79歳で迎えました。この間

中、ずっと働きながら、日本の経済史とともに歩み続けてきました。まさに生き証人です。

現在の宝商会に入る前は、証券会社のトップを支える参謀として会社経営を支え続けてきました。文才があり、人を動かす言葉の力を持っています。

その福井さんが、こう言っています。

「日本は封建社会だったけれど、その後は資本主義が押し寄せた。次は何だろう。永遠に続く制度なんてないからね」

福井さんが見聞きしてきたことが、社会の役に立たない訳がありません。こういった方々の価値を見出すのは、私たち現役世代の役割です。

写真家の笹本恒子さんは、こう言います。

「60歳で還暦を祝うなんて早すぎるわね。お祝いはもう少し先でもいいんじゃないかしら」

この方は、98歳のフォトジャーナリストです。71歳で、写真家としての人生を再スタートさせました。

報道の世界に身を投じたのは、27歳の時のことです。当時、女性のフリーの報道写真家が少ない中で、米ライフ誌の表紙が女性写真家の撮った写真だったことを知り、決意をしました。

その後、テレビ時代の到来とともに、雑誌が次々と廃刊しました。写真家が増えて、競争が激しくなりました。

「写真だけでは食べていけない」と49歳のときに、洋裁の腕を活かし、注文服サロン「ササモト・デザイン・ルーム」を創業しました。3年ほどは順調であったものの、段々と既製服に押されてきました。

次は、フラワーデザインの勉強に取り掛かります。54歳の時に「フラワーデザイン教室」という本を出版すると、ブームも到来し、仕事が増えていきました。

その後も、ブームが下火になるとアクセサリーなどを作って販売するなど、写真の世界からはすっかり遠のいていたのですが、71歳の時に転機が訪れます。

かつて撮影した写真の展覧会が開催され、それが大成功を収めたのです。これが、再びカメラを持つきっかけとなりました。

笹本さんの経歴には、現役で、しかも第一線で長く活躍するためのポイントが凝縮されています。そのポイントとは、その時代に合わせて、必要とされる仕事をする事なのではないでしょうか。

企業側からみれば、「40歳定年制」は、雇用の硬直性を解消する効果があります。めまぐるしく変わる経営環境に人材を対応させることが可能になるからです。

一方、65歳までの定年雇用制は、社員にとっては、安定を保障するよい制度であると言えます。一番おカネのかかる40歳で会社を放り出されてしまつては、うかうか子どもも産めませんし、家を買うこともできません。

ただ、最初に勤めた会社が生涯安泰とは限りません。また、今後定年を迎えても、働き続ける必要がある時代が到来するかもしれないのです。

定年で仕事を失った際に、収入が必要でも手に職がないために働くことができない、といった事態に陥りかねません。

大学を卒業して同じタイミングで会社に入社し、リタイア時期を一律の年齢に区切ってしまう。こういった発想は、人的資源のポテンシャルを棄損しているのかもしれない。

現在は、有期の契約が原則3年と固定されていますが、10年、20年といった多様な形態を認めることで、働き方の多様化が実現できます。

働き手も企業も、仕事の区切りを作り、その機会を利用して、柔軟に社会に対応していくことも必要なのではないでしょうか。

仕事の内容、働く時間、働く場所をできる限り自分の意思で決めたい。そう思って私は独立しました。そのおかげで、世の中には、いろいろな仕事があることが分かりました。自分の力や経験を発揮できる場所は少なくありません。

このことは、働き方に一旦区切りをつけたからこそ、気付くことができた事実なのです。